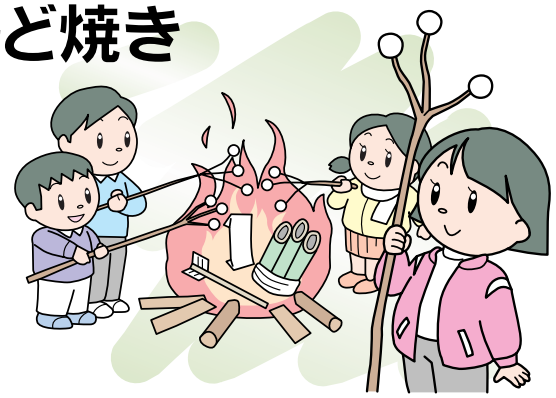
どんど焼き



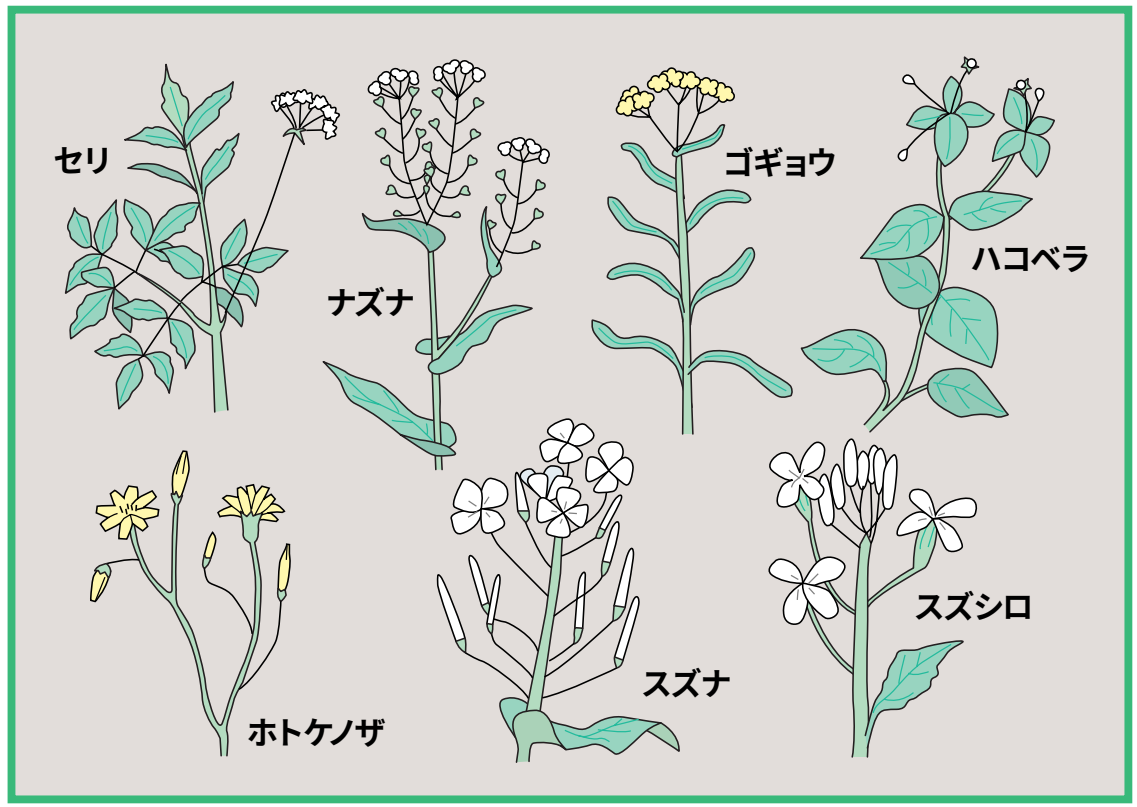
１月15日は小正月。15日前後になると、各地でどんど焼きが行われます。これは左義長（さぎちょう）ともいわれ、注連飾りや門松、お寺や神社のお札や達磨などを高く積み上げて勢いよく燃やし、この火でだんごを焼き、そのだんごを食べると一年間病気をせず健康でいられるというものです。また、書き初めをこの火で燃やすと、字が上手になるともいわれています。

相模原では養蚕が大変盛んだったので、このどんど焼きのだんごを繭玉に見立てました。昔は農家では１月11日に、鍬はじめといって今年も豊作であるようにと田畑の神を祀り、それから山に行って農木といわれる、繭玉を刺す山桑、つげ、ぬるで、梅を切りました。そしてその日の午後に繭玉にする米の粉を石臼で挽きました。

13日の夕方になると挽いた米の粉で繭玉を作り、農木を蔟（まぶし）〈蚕がこの中で繭を作る〉に見立て、繭玉をたくさん刺して座敷の正面に飾りました。今年もこのように蚕がたくさん繭を作ってくれるようにと、蚕の神様にお願いする行事を「お蚕やとい」といいます。それと同時に梅の枝に繭玉を３～５個刺したものを作り、14日のどんど焼きで焼いて無病息災を願いました。

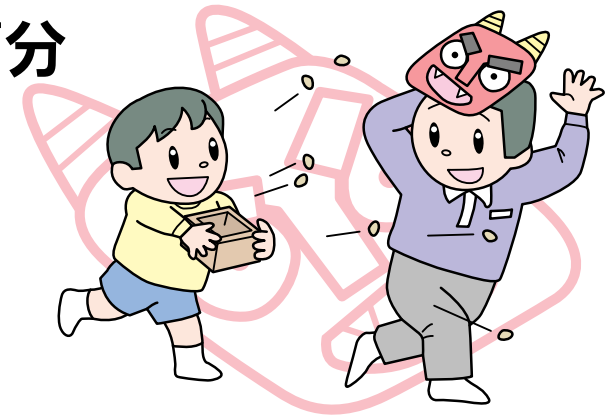
セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロ、この７つを春の七草（ななくさ）といい、これを１月７日に七草粥にして食べます。七草のほとんどは薬草であり、冬に不足しがちなビタミン類を補うという意味でも理想的な食べ物です。

最近ではだんだん野原も少なくなり七草を探すのはなかなか大変ですが、スーパーなどで７種類をパックにしたものが手に入るようになり､手軽に七草粥を楽しめるようになりました。



参考資料●お母さんへのおみやげまっ黒く炒った豆〈さがみはらの年中行事〉井上 正路 編　丸井図書出版
大日本百科事典　小学館
子どもの行事12か月　萩原秀三郎･本間　昇 著　草土文化

節分



「鬼は外、福は内」と言いながら炒った豆をまいて鬼を追い払うという習慣は室町時代初期から始まったといわれています。

炒った豆をまくのにはこんな昔話が伝わっています。昔、山に鬼が住んでおり、冬になると食べ物がなくなって、里に下りてきては人間の子どもをつかまえて食べてしまいました。これを見かねた神様が一握りの豆を鬼に与え、「この豆の芽が出たら人間を食べてもよい。芽が出ないうちは絶対に食べてはいけない」という約束をしました。鬼は急いで山に戻り豆を蒔きましたが、何日経っても芽が出ず、結局その年は子どもを食べるのを諦めました。その豆は炒ってあったために芽が出なかったのです。それから、神様は里の人々に「これから毎年、冬の終わりになったらよく炒った豆を庭や座敷にまくように。そうすれば鬼はその豆を見て逃げていきます。ただし、その豆は絶対に芽が出ないようによく炒るのですよ」を教えました。それから今のように豆をまくようになったといわれています。

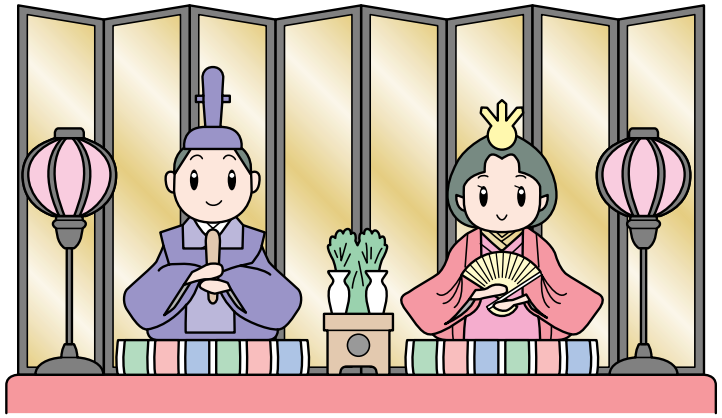
邪気除けとして、戸口や軒にヒイラギにイワシの頭を刺したものを立てる習慣もあります。イワシは鬼がその臭気を嫌うためで、ヒイラギは鬼の目を突き刺すので、家のなかに鬼が入れないというものです。

また、節分の夜にヒイラギに刺したイワシの頭と尾を火にかざして焼きながら、「いも虫、毛虫の口焼き」など、作物に害を与える害虫の名を言ってつばをかけるという風習がある地域もあり、これを害虫の口焼きといいます。

セツブンソウ

早春に芽を出して、節分の頃に白い花を咲かせることから「セツブンソウ」といわれる日本特産の植物です。キンポウゲ科の小型の多年草で山地の木陰などに群生します。高さは５～15センチほど。葉の中心から１センチくらいの花柄が１本直立し、その先端に２センチほどの白くかわいい花を１つ咲かせます。

ひなまつり



まだまだ寒いこの時期ですが、ひな人形を飾った部屋はぱっと明るく、春の訪れを告げてくれているようです。

その昔、人間の罪やけがれを祓うため、紙で人の形を作りご馳走を供えて、川や海に流したり火で焼いたりし、これがひなまつりの起源とされています。ひな人形を子どもの身代わりにして病気や災いを背負わせて海や川に流す「流しびな」という風習が残っている地域もあります。

今のようにひな壇に人形を飾るようになったのは文化・文政時代の頃からです。

ひなまつりは桃の節供とも言われ、女の子の健やかな成長を願って、ひな人形と一緒に桃の花を飾ります。また、ひな人形に供える３色の菱餅は桃の葉の形を表しています。そして一番上の緑色が桃の葉を、真ん中の赤は桃の花を、下の白は雪の季節を通り越して桃の花が咲いたことを表しています。

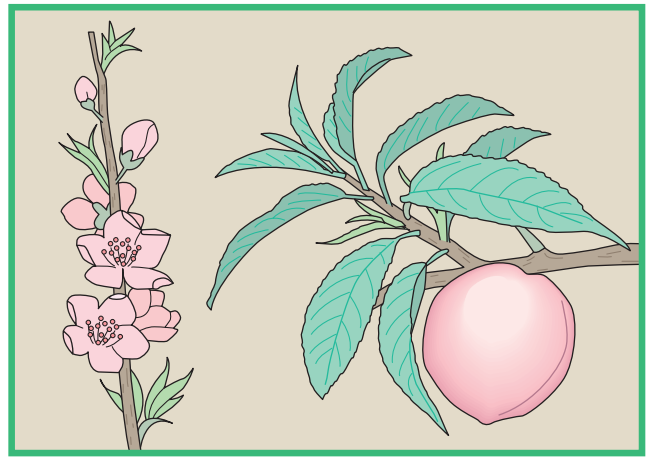
モモ

バラ科サクラ属の落葉小高木

バラ科サクラ属の落葉小高木。原産地は中国北部の高原地帯。ひなまつりには欠かすことのできないモモは、中国では紀元前から栽培され、邪気を払う霊木としてとても大切にされてきました。西遊記の孫悟空は、9000年に１度だけ実るモモの実を食べて不死身になったといわれています。

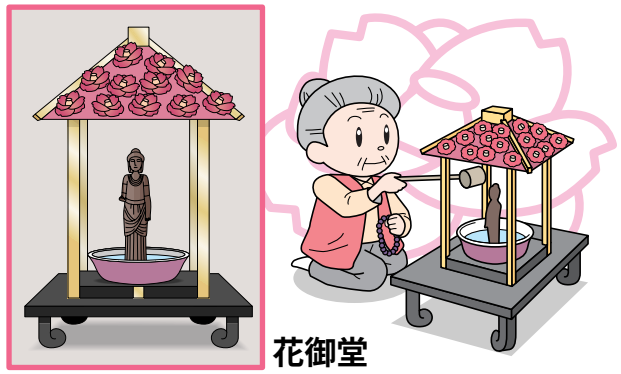
日本へは、弥生時代には中国から伝わったといわれており、江戸時代には約200種類もの品種が 生まれました。特に八代将軍吉宗は、「生類憐れみの令」を発令した五代将軍綱吉が多くの犬を飼わせていたところを壊し、ここを桃園に変えたといわれています。

モモの種類の中でも特に花の美しい品種を花桃（はなもも）といい、桃色で八重咲きの「矢口」をはじめ多くの名花がありますが、相模原市横山にあった県園芸試験場で改良育成された「照手紅」「照手桃」「照手白」というほうき性の花桃もたいへん美しい花です。4月中旬に当公園で見ることができます。



参考資料●お母さんへのおみやげまっ黒く炒った豆〈さがみはらの年中行事〉井上 正路 編　丸井図書出版
大日本百科事典　小学館
子どもの行事12か月　萩原秀三郎・本間　昇 著　草土文化

花祭り



花御堂

四月八日は仏教を開いたお釈迦様の誕生日です。

春爛漫のこの日、お寺では花御堂（はなみどう）と呼ばれる小さなお堂をいろいろな花で飾り、その中で天を指差して立つ、生まれたばかりのお釈迦様の像に甘茶をかける行事が行われます。

お釈迦様はインドの釈迦族の王子です。ある日母親のマヤ夫人が大きな菩提樹の木の下で休んでいたら、きれいな花が咲き始めました。そして夫人がその花を折ろうとした時に、王子が生まれたといわれています。そして花を折ろうとした時に生まれたことから、この王子は花の精であると考えられ、四月八日には花御堂を作り「花祭り」として祝うようになりました。

お釈迦様は誕生するとすぐに「天上天下唯我独尊（てんじょうてんがゆいがどくそん）」と言って、天地を指差しました。天上の神はそれを見て大変に喜び、それを祝うように、九頭の龍がお釈迦様に五色の美しい水をかけて、産湯をつかわせたといわれます。また、この日には甘露の雨が降ったともいわれ、こんなところからお釈迦様の像に甘茶をかける風習が生まれたのです。

アマチャ

ユキノシタ科の落葉低木

ヤマアジサイの中で、葉に甘みのあるものを「アマチャ」といいます。

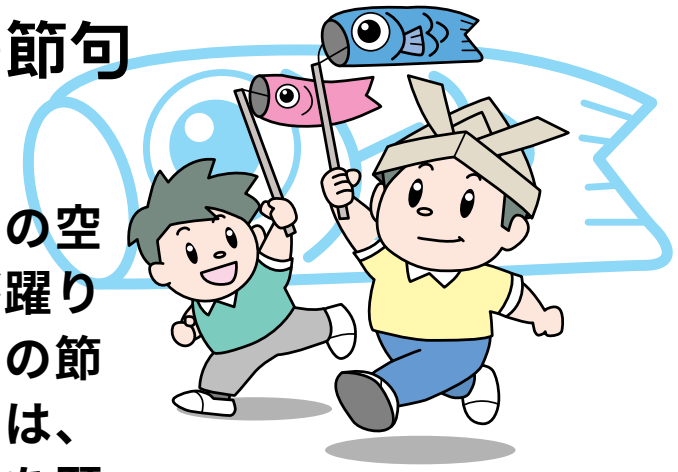
花の時期は七月ごろで、夏から秋に葉を採り、しおれさせたものをもんでから干し、これが「甘茶」となります。生の葉ではほとんど甘味が感じられませんが、乾燥すると甘みが出てくるのです。甘茶はお茶として飲用されます。また、糖尿病には砂糖の代用としたり、錠剤の糖衣やしょうゆなどの甘みをつけるのにも使用されます。

相模原麻溝公園内にも「アマチャ」のいくつかの品種が植栽されています。

アジサイは相模原市の「市の花」でもあり、市内のあちらこちらに植栽されています。花の時期には濃緑の葉に、コバルトブルーやピンクの花がいっせいに開き、梅雨のうっとうしい気分を爽快にしてくれます。相模原麻溝公園内では75種類ものさまざまなアジサイを観賞することができます。

参考資料●お母さんへのおみやげまっ黒く炒った豆〈さがみはらの年中行事〉井上 正路 編　丸井図書出版
大日本百科事典　小学館
子どもの行事12か月　萩原秀三郎・本間　昇 著　草土文化

端午の節句



　碧く晴れあがった５月の空に、勇ましく鯉のぼりが躍ります。　５月５日は端午の節句。男の子のいる家庭では、たくましく健やかな成長を願って、武者人形を飾ったり、また、中国の伝説上の勇者、鍾馗（しょうき）様を描いた幟を立てる地域もあります。

　中国では古くは漢の時代から５月５日を「端午」「重五」といい、蓬（よもぎ）の人形を門に掛け、菖蒲酒を飲んで災厄や病魔（びょうま）を払う日としました。「端」は初め、「午」は午の意で、５月の初めの午の日をさします。　日本でもこの日には綱引きや競馬、騎射などの催しや、災厄を除くため菖蒲の葉を軒に差したりと、端午の節句の行事が行われるようになりました。

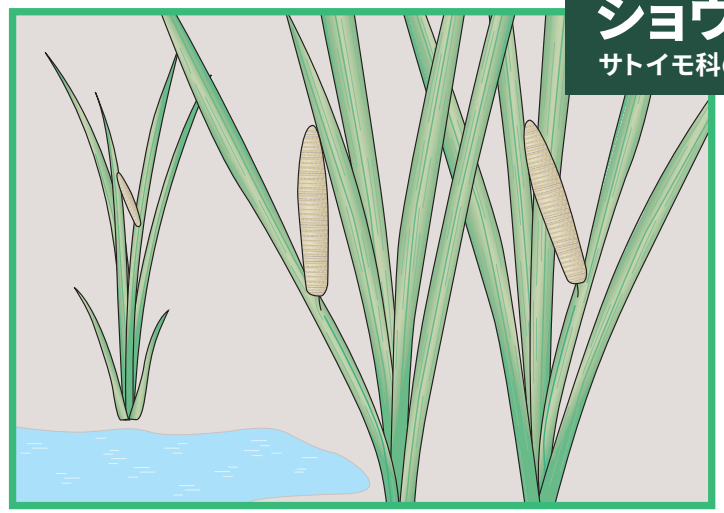
　この行事の内容が勇壮で、菖蒲が「尚武」に通じることから男児の前途を祝う節句になったといわれています。

　このあたりの慣わしでは初節句に母親の実家から鯉のぼりや武者人形が贈られ、お返しには柏餅やかさごの干物、清酒が使われるようです。

　また、鯉のぼりを立てるようになったのは、江戸時代からで、滝をも昇る力強い魚、鯉にあやかったものといわれています。

ショウブ

サトイモ科の常緑多年草



　古くはアヤメと呼ばれましたが、現在の花を観賞するアヤメとは別種です。また、キショウブ、ハナショウブとも異なり、これらはアヤメと同種のものです。

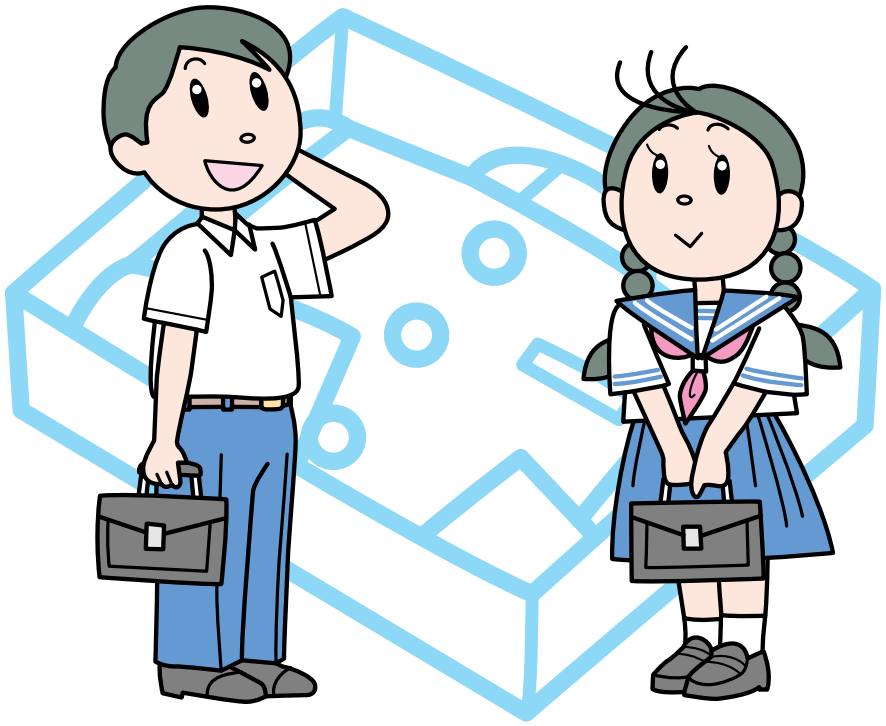
　菖蒲は根茎や葉など全体に香気があり、また根茎には精油を含んでいて、漢方では菖蒲根と称し、芳香性健胃薬として用いられます。

　５月５日には、菖蒲湯といってきざんだ菖蒲の葉を風呂に入れる風習があり、これは室町時代の文献にも見られます。菖蒲湯に入ると邪気を払い、健康を保てるといわれています。

　また、端午の節句には欠かせない柏餅。この柏餅を包むカシワは、ブナ科の落葉樹の葉で、モチガシワ・カシワギともいわれています。これは炊葉（かしいば）という意味で、昔はこの葉を食器として使われていたことからこのように呼ばれるようになったそうです。

参考資料●お母さんへのおみやげまっ黒く炒った豆〈さがみはらの年中行事〉井上 正路 編　丸井図書出版
大日本百科事典　小学館
子どもの行事12か月　萩原秀三郎・本間　昇 著　草土文化

衣替え



６月１日は衣替え。この日から中学生や高校生など学生や、会社など制服のあるところでは、冬服から夏服に切り替えるところが多く、夏のはじまりを感じさせてくれます。とはいえ、夏本番はもう少し先。この時期は、梅雨冷えの肌寒い日が続くこともあり、押し入れの奥にしまった冬物のセーターが恋しくなったりします。

昔は季節によって服装が決められていました。平安時代の宮中のしきたりにならい、江戸幕府では旧４月１日から袷（あわせ）を、５月５日から８月末までは帷子（かたびら）を、９月１日から８日までは袷を、そして９月９日から３月末までは綿入れを着るという服装についての、一つの目安を定めていました。

百人一首でおなじみの持統天皇の歌、「春すぎて　夏来にけらし　白妙の　衣ほすてふ　天の香具山」は飛鳥時代のころの夏の訪れを歌ったものです。昔の人々が夏支度をする情景が目に浮かびます。

この辺では春の終わりには袷からセル（細かい梳毛糸で平織にした和服地）の単衣に、６月１日からは夏の服装に着替えました。また梅雨寒の日にも衣替えの後には夏の単衣を重ね着し、冬物は身につけなかったという習慣があったようです。　また、６月１日はへびが桑の木の下で脱皮する日であるとか、虫が脱皮するのを祝う日ともいわれ、ムケ節供、衣脱き朔日（ころもぬぎついたち）などという地方もあるようです。人間も虫たちと同じように、この日から夏用の衣に着替えるということなのでしょう。

現在では冷暖房器具の普及によって、服装にも季節感がなくなっているので、衣替えという習慣も身近に感じられなくなりました。

参考資料●お母さんへのおみやげまっ黒く炒った豆〈さがみはらの年中行事〉井上 正 路 編　丸井図書出版
大日本百科事典　小学館
子どもの行事12か月　萩原秀三郎・本間　昇 著　草土文化

七夕

　牽牛と織女の話は誰もが知っているロマンチックな七夕伝説です。牽牛星はわし座のα星アルタイル、織女星はこと座のα星ベガ。この２つの星が、鵲（かささぎ）が翼を並べて造った天の川の橋を渡って、年に一度だけ逢うことができるのです。この２つの星を恋人同士に見立てたのは、７月はじめになると２つの星が著しく接近するからだといわれています。　この２つの星に技芸の上達を願うという風習は中国から伝わった乞巧奠（きこうでん）で、奈良時代から宮中の儀式としてはじまり、後に一般でも行うようになりました。

　今のように笹竹を飾りつけるようになったのは江戸時代から。五色の短冊に歌や願い事を書いたり糸や筆の形を描いたものをなどをつるして門口に立て、習字や裁縫が上達するようにと星に願うようになりました。今でも蓮や里芋の葉の露で墨をすって字を書くと上達するとか、七夕の日の星の光で針の穴に糸が通せると裁縫が上手になるといわれています。

　町をあげての七夕まつりは仙台や平塚が全国的に有名ですが、相模原市の四大まつりの１つとして「橋本」でも盛大に行われます。

タケ

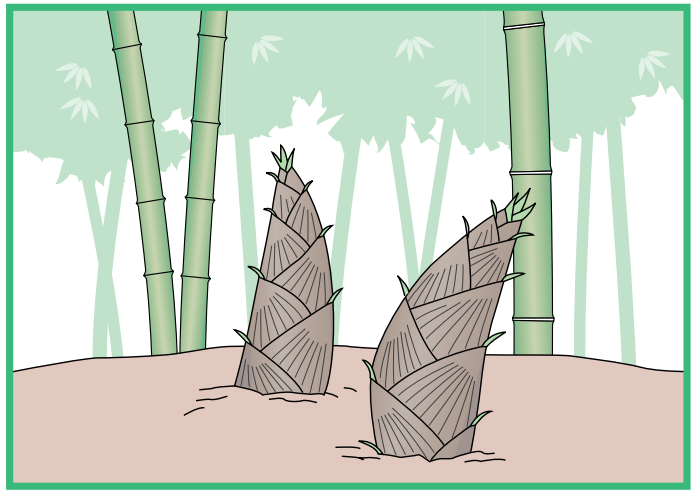
イネ科のタケ亜科

　イネ科タケ亜科、また独立させてタケ科というときもあります。タケは英語ではbambooといいますが、これは竹が燃える時に生じる爆発音からきているといわれています。竹は熱帯地方の特に雨の多い地域に豊富で、世界に約600種が知られて います。

　タケノコは生長が早いことで有名ですが、１日に、モウソウチクで119センチ、マダケで121センチもの生長速度で伸びていきます。

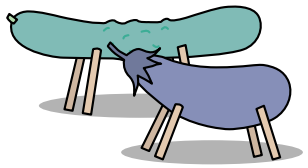
　タケの花はめったに開花せず、開花の周期は短くても数年、長いもので100年以上といわれてい ます。しかし開花の時には竹林全てがいっせいに開花、栄養分を使い果たしほとんどが枯死してしまうということがあります。このせいでタケの花は凶年に咲くといわれるのかもしれませんが、これは迷信です。

　また、タケの特性を生かした諺も多く、「タケを割ったような性質」「タケに雪折れなし」「タケに油を塗る」などがあります。



参考資料● お母さんへのおみやげまっ黒く炒った豆〈さがみはらの年中行事〉井上 正 路 編　丸井図書出版
大日本百科事典　小学館
子どもの行事12か月　萩原秀三郎・本間　昇 著　草土文化

お盆



お盆は正しくは盂蘭盆会（うらぼんえ）といい、新暦では７月13日～16日ですが、学校や会社の休みに合わせ、月遅れの８月13日～16日に行うところが多いようです。

盂蘭盆というのは古代インドの言葉で、逆さに吊されて苦しんでいる死者という意味です。ある時釈迦の弟子の目連が神通力を使って、亡くなった母親を見てみると、餓鬼道に落ちて非常に苦しんでいました。目連はこの母を救いたいと、釈迦の教えに従って７月15日に百味の飲食（おんじき）を作って盆に盛り、僧侶たちに供養しました。これによって母は救われ、同時に過去７世の父母も救われたといいます。

この中国の故事がもとになり、後に日本に伝えられ日本の農耕儀礼とが混ざって、今のような祖先の霊を祀るお盆の行事にとなったのではないかといわれています。

８月13日の夕方には家の門口で迎え火をたき、祖先の霊を迎えます。そして16日の夕方には送り火をたいて送ります。また、キュウリやナスで馬や牛を作り飾ることがありますが、これは精霊が馬に乗ってやってきて、牛に乗って帰るためといわれています。

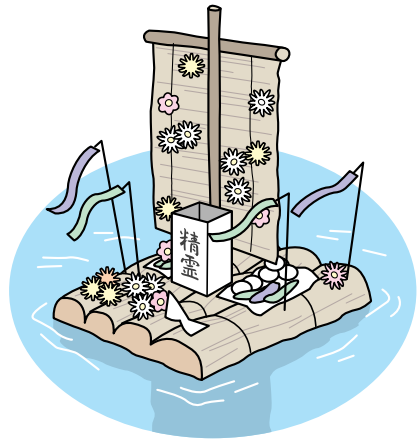
盆踊り

この時期になるとあちらこちらから祭ばやしが聞こえてきます。夏祭といえば欠かせないのが盆踊り。徳島の「阿波踊り」や八尾の「おわら」など、観光の目玉になっているものもあります。

もとは悪霊や厄神を鎮めて追い出したり、祖先の霊を供養して魂が迷わず来世で安住できるようにという目的がありました。

また、当麻山を開いた一遍上人（いっぺんしょうにん）は時宗を広めるとともに、念仏を唱えながら踊ってお盆の日に先祖を祀りました。これが盆踊りの始まりだともいわれています。

精霊流し

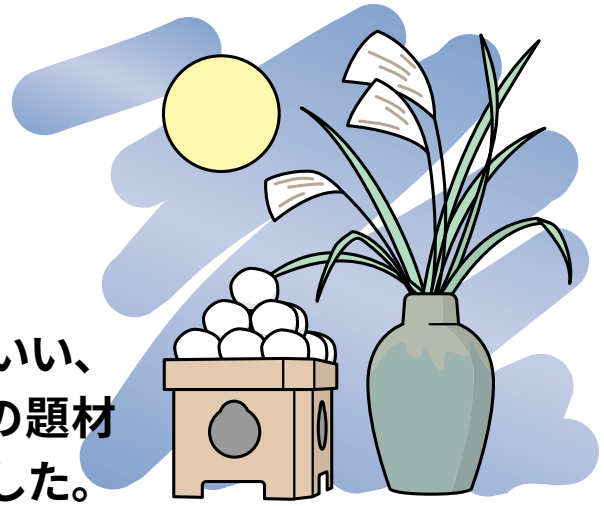


８月13日に迎え火をたいてお迎えした先祖の霊は16日に送り火をたいて送ります。この時に盆棚にお供えしたいろいろな供物をキュウリやナスで作った牛や馬の背に背負わせたり、おがらなどで作った精霊船に灯籠やろうそくを立てて、川や海に流し精霊をあの世へ送り出します。これが精霊流しや灯籠流しともいわれ、何とも物悲しく、風情のある行事です。

しかし、最近では汚染問題などで河川に流すことを禁止しているところもあるので庭先で焼いたり、また菩提寺に納めるなどします。

参考資料● お母さんへのおみやげまっ黒く炒った豆〈さがみはらの年中行事〉井上 正路 編　丸井図書出版
大日本百科事典　小学館
子どもの行事12か月　萩原秀三郎・本間　昇 著　草土文化

十五夜



旧暦の８月15日の月を仲秋の名月といい、昔からその美しさを讃えられ、絵画の題材になったり、歌などにも詠まれてきました。

中国の伝説や万葉集によれば、月には大きな桂の木があり秋になるとその葉が色づいてきれいになるので、仲秋の月は美しいと考えられていました。

また月にいる月兎がこの桂の葉で不老長寿の薬を作っていて、十五夜の晩にはその葉が夜露とともに降ってくるので、この晩の月を拝み、夜露に濡れて月祭りをしたともいわれています。

今でも十五夜にはお月見を楽しみますが、昭和の初めころまではもっと盛んで、５本のすすきのほか、おみなえし、ききょうなど秋の七草を生け、里芋、さつまいもを５個ずつとだんご、季節の果物や菓子をたくさん月に供えました。その菓子などをもらうため子どもたちは家々を廻ったものでした。

十五夜の月を楽しんだら、旧暦９月13日の十三夜のお月見もしないと「片月見」になるといわれています。これは十五夜が中国から伝えられた風習なのに対して、十三夜は日本古来からの月見の風習なので、両方の月を観賞しなければいけないというわけなのです。

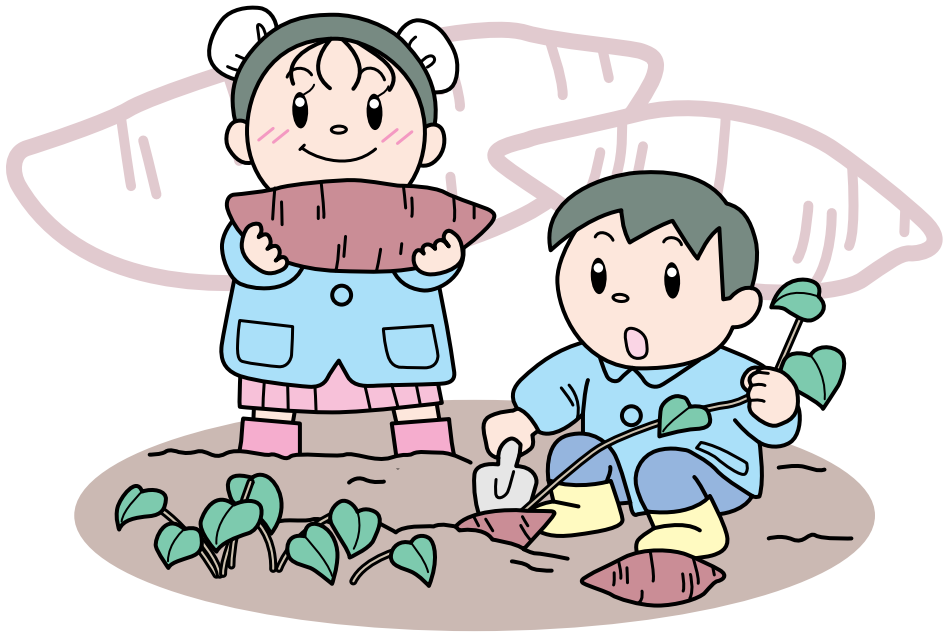
ススキ

イネ科多年草

お月見には欠かせないススキ。花穂が尾に似ているところから、尾花（おばな）ともいいます。イネ科の多年草で、ハギ・キキョウ・クズ・フジバカマ・オミナエシ・ナデシコとともに秋の七草の一つとなっており、日本をはじめ東アジアの山野に多く自生しています。またススキの茎は屋根を葺くときにも使われ、その場合にはカヤとも呼ばれます。これはカ（上）ヤ（屋）の意味で、はじめカヤは屋根を葺く草の総称でしたが、後にススキだけを指すようになったとみられています。

参考資料●お母さんへのおみやげまっ黒く炒った豆〈さがみはらの年中行事〉井上 正路 編　丸井図書出版
大日本百科事典　小学館
子どもの行事12か月　萩原秀三郎・本間　昇 著　草土文化

十三里いも



天高く馬肥ゆの秋、「石焼きいも」の声があちらこちらで聞かれる季節になりました。さつまいもはこの相模原でもたくさん栽培されており、この時期になると幼稚園の園児たちが歓声をあげながら「いも掘り」をする姿もよく目にします。

相模原は昔、養蚕の盛んな地方でした。ところが昭和６、７年ころの不景気で生糸や絹織物の値が暴落し、大変な痛手を受けました。そこで、乾燥した土地を活かしてさつまいもを栽培することになったのです。

さつまいもの栽培が盛んになるにつれ、品種改良も行われるようになり、大変おいしい品種が生まれました。これが十三里いもといわれた「高座赤（こうざあか）」という品種です。

なぜ十三里なのかというと、焼きいもにすると、栗より（九里四里）おいしい、つまり９里＋４里＝１３里で「十三里いも」というわけです。

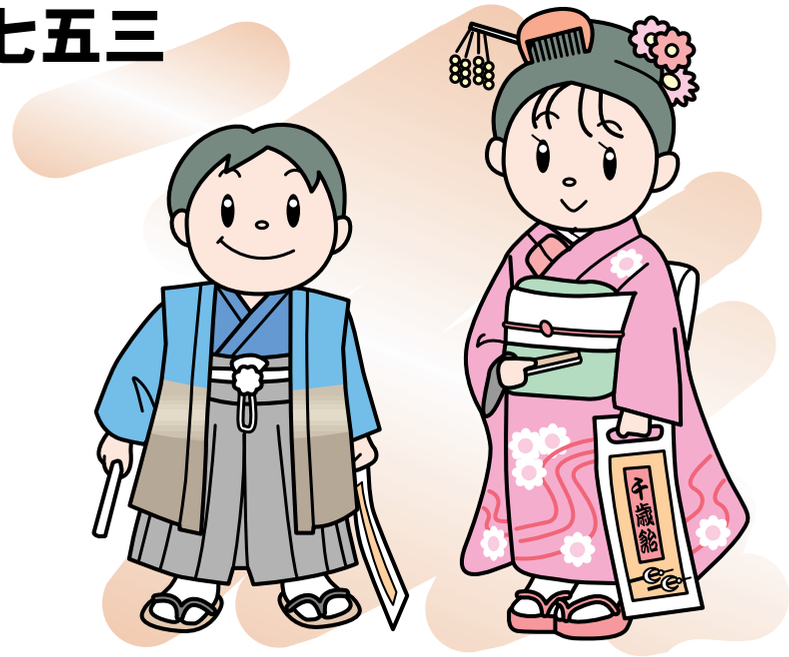
その当時は１０月になると、どこでもさつまいもの収穫が始まり、俵に詰めたいもを東北地方に出荷したり、八王子・町田方面へ売りに行く人々で活気づいていました。

さつまいもの原産地はメキシコから南米北部と推定されています。これがコロンブスによってスペインに運ばれ、その後フィリピン、中国に、さらに琉球へ伝わっていったとされています。そして江戸時代初期、長崎に伝えられ、これが各地に広まって栽培されるようになりました。

江戸中期に入り、八代将軍吉宗の命を受けて、蘭学者青木昆陽がさつまいもの栽培法を研究し、各地に広めて多くの人を飢饉から救ったという話は有名です。それ以降、さつまいもは米や麦に次いで大切な食料になりました。

参考資料● お母さんへのおみやげまっ黒く炒った豆〈さがみはらの年中行事〉井上 正路 編　丸井図書出版
大日本百科事典　小学館
子どもの行事12か月　萩原秀三郎・本間　昇 著　草土文化

七五三



紅葉前線もずいぶん南下し、街路樹のいちょうも色づきはじめました。11月に入ると、髪を結いあげ晴れ着やドレスを着てきれいにお化粧をした女の子や、羽織袴やタキシードに身を包んだ男の子たちを見かけるようになります。

この七五三、現在では男の子が３歳と５歳、女の子が３歳と７歳で祝うのが一般的になっています。

昔は男の子は５歳になると、初めて袴をつけて、碁盤の上に乗り、四方に向かっておじぎをする袴着（はかまぎ）と呼ばれる儀式を行いました。これは幼児から少年になり、勝負に勝てる男の子になるようにという願いが込められたものでした。また、女の子は３歳になると、幼女から少女になったお祝いという意味で、これまで着ていた着物のひもを落として、

七五三

初めて帯を結ぶという紐落とし、帯結びと呼ばれる儀式を行いました。

そして男女とも７歳になると、「氏子入り」といって、神様からも社会からも人格を承認され、氏神様にお参りしたといわれています。

このようにもとは別々に行っていた儀式がひとつにまとまり、今のような七五三という行事になったのは明治時代以降であるといわれています。　昔は子どもの死亡率が高く、７歳になるまで元気に成長するのはとても大変なことでした。こんなところから、子どもたちの成長を喜び、お祝いするという風習が生まれたのでしょう。

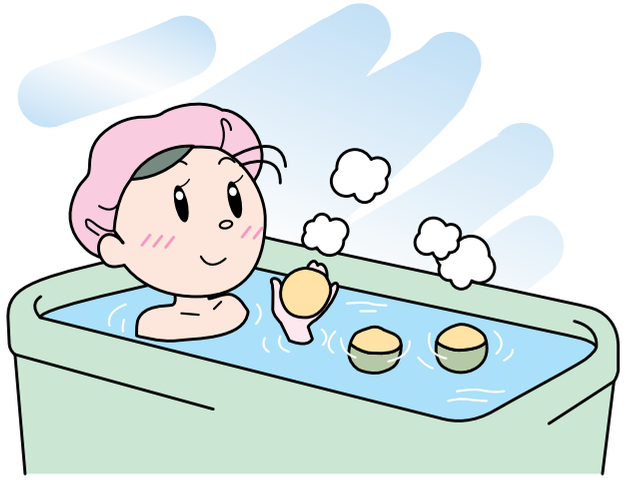
しかし最近では本来の七五三の意味が忘れられ、ファッションショーと見紛うようなこともしばしばです。特に７歳の女の子には母方の実家から着物や帯を贈るという習慣がある地域もあり、そんなことも一因なのかもしれません。

また、七五三にはつきものの千歳飴は食べる時に長く伸びることにちなんで、長生きができるように、幸福が長く続くようにという願いが込められています。

参考資料● お母さんへのおみやげまっ黒く炒った豆〈さがみはらの年中行事〉井上 正 路 編　丸井図書出版
大日本百科事典　小学館
子どもの行事12か月　萩原秀三郎・本間　昇 著　草土文化

年中行事●12月

冬至



立春や立冬、秋分などとともに二十四節気の一つで、この日は一年で一番正午の太陽の高度が低く、昼の時間が一番短くなります。

冬至を過ぎるとだんだんに昼が長くなっていきますから、昔はこれを尊いものの復活や再生であると考えていました。例えばクリスマスももとは冬至の夜の祝いで、太陽の誕生日とされていたこの日をキリストの誕生日に移行したものであるといわれています。

また、中国では冬至の日に天を祀る儀式を行い、「唐の正月」といいました。日本では弘法大師が訪れると伝えられていた時代もあり、この夜に弘法大師を祀る大師講（だいしこう）を催すところもあります。　今では冬至の夜にはゆず湯に入り、かぼちゃや小豆粥を食べる習わしが一般的ですが、相模原では、この他にも油揚げやけんちん汁を食べる風習があります。これはビタミンの多いものを食べ、身体が芯から暖まるゆず湯に入ることで、冬を健康で乗り切るという昔からの生活の知恵が今に伝えられているものです。

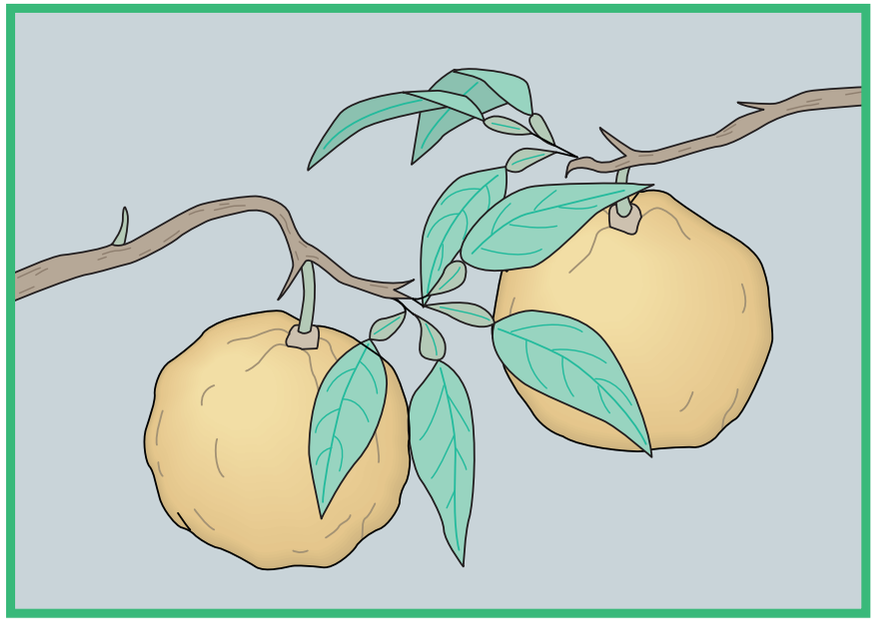
ユズ

ミカン科の常緑半高木

ミカン科の常緑半高木。香りのよいユズは日本料理には欠かせません。原産は中国揚子江上流といわれており、朝鮮半島を経由して、日本へ伝わったと考えられています。柑橘類のうちで最も寒さに強く、耐乾・耐湿性にも優れており、北は青森県でも生育します。

ユズの花は白色、または淡い紫色です。

皮は酢の物や吸い物の香りづけに使ったり、汁は酸味が強くゆず酢に使われます。砂糖で煮て柚香煮にしたり、またお菓子の材料にもなります。特にゆずに砂糖、米の粉などを混ぜて蒸した和菓子、柚餅子（ゆべし）は有名です。



参考資料● お母さんへのおみやげまっ黒く炒った豆〈さがみはらの年中行事〉井上 正路 編　丸井図書出版
大日本百科事典　小学館
子どもの行事12か月　萩原秀三郎・本間　昇 著　草土文化